アジア文化研究別冊

Asian Cultural Studies 18

Special Issue

2010

Parody in Japanese Culture Part II
続・パロディと日本文化

国際基督教大学 学報 3-A
International Christian University
Publications 3-A

ISSN 0916-6734

江戸の寺社開帳をパロディ化した見世物「とんだ霊宝」

クリストフ・マルケ

パロディというと基本的には文学の形式であり、有名な作品を模作しながら、その内容を変えて滑稽的な効果、あるいは風刺的な効果を狙うものとされている。つまり、多くの場合は言葉による遊びである。今回のシンポジウムの発表も、ほとんどがこの種の文学的なパロディが問題になっている。しかし、文学にとどまらず、視覚的なパロディにもその例は数多く見受けられ、江戸文化を考える上で無視できない現象になっている。ここで私は文学でも、美術でもなく、少し違う視点からこのパロディの問題を考えてみることにする。江戸時代に庶民が実際に体験した「見世物」における造形的なパロディを対象にし、具体的に「とんだ霊宝」を例にこの問題について論じたい。

「とんだ霊宝」とは、簡単に言えば、江戸時代に盛んに行われた寺社の開帳のパロディである[1]。つまり、寺社の宝物の代わりに、魚介の乾物や野菜で仏像などを作って一定の期間展示する、いわゆる「細工見世物」の一種である。十八世紀末の安永六～七 (1777–78) 年に、江戸の盛り場である両国広小路で初めて行われ、大評判となり、後に「おどけ開帳」の名で大坂にまで流行した。この「とんだ霊宝」は当時の様々な引札、黄表紙、随筆などによって記録されているので、その様子を窺い知ることができる。

この「とんだ霊宝」を紹介する前に開帳のことについて簡単に触れておこう。周知のように開帳は人々に結縁の機会を与える宗教行事であると同時に、一種の祭りでもあった。そのなかでも「出開帳」は、地方の寺院の霊物・霊宝を大都市に送って展示する、今で言う巡回展覧会であった。十八世紀後半（寛保～天明期）になると、このような出開帳がピークを迎え、江戸だけでも年に平均六回以上行われたという[2]。多くの開帳は両国の回向院の境内で開催され、『江戸名所図会』（巻十七、天保七年、1836）［図 1］に「回向院開帳祭」として紹介されているほどである。その賑やかな様子を描いた挿絵には「諸国の霊仏霊神等結縁のため大江戸に出でて啓龕せんと欲するもの多くは当院に於て拝せしむ諸方より便りよき地なる故殊に参詣多し」と記されている[3]。名古屋など主要な地方都市でもこのような興行は行われ、それを地元の絵師の高力猿猴庵が見事に描いている。たとえば名古屋で四回も行われた嵯峨の清涼寺の出開帳は、江戸時代に善光寺の開帳と並んで人気を博しており、絵解き僧

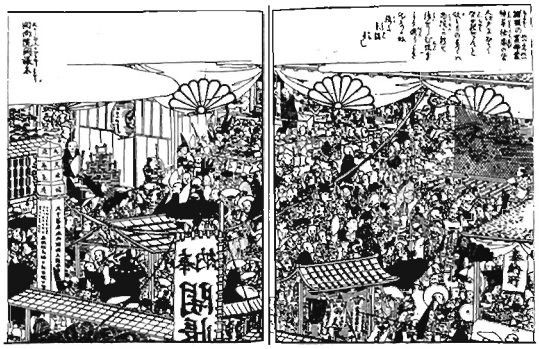

図1 「回向院開帳祭」『江戸名所図会』天保七 (1836) 年

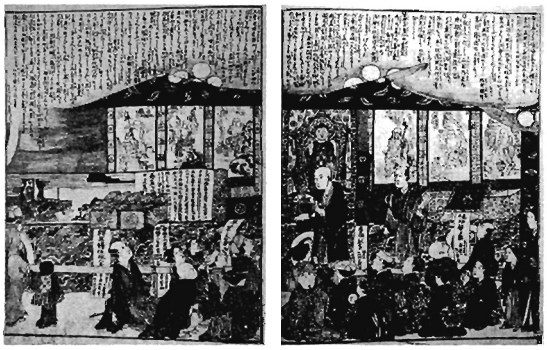

図2 名古屋の清涼寺の出開帳『嵯峨霊仏開帳志』文政二 (1819) 年（名古屋市博物館蔵）

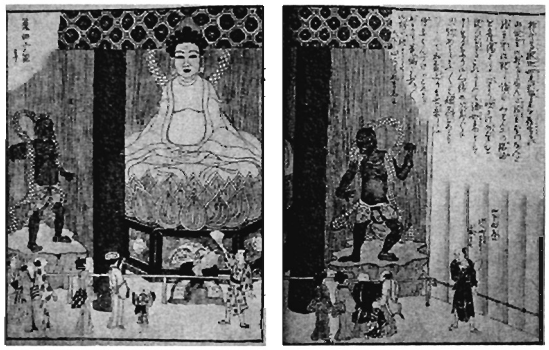

図3 名古屋七寺境内における籠細工『新卑姑射文庫初編』文政三 (1820) 年（名古屋市博物館蔵）

が霊宝を一つ一つ詳しく解説し、観覧者が真剣に聞いている場面を『嵯峨霊仏開帳志』（文政二年、1819)[4]に収めている［図2］。

また、開帳を見世物化したものとしては、鳥、獣、虫、仏像などを竹を編んで造った籠細工で再現した見世物もあり、文政二年二月に名古屋の七寺境内で行われた際に、同じ絵師の猿猴庵がその様子を記録している[5]［図3］。この見世物の目玉である大釈迦は籠細工に紙を張ったうえに、金箔摺りの布が施されている。猿猴庵の絵の付録に「此見せ物京大坂にて繁昌に付其芝居より売弘めし番附絵図の一枚ずりの品及び忠臣蔵上るりの文句に見立し評判の板行もあり」と書いてあり、先に上方で行われた見世物が人気になり後に名古屋でも開催さ

図 4　大坂四天王寺の釈迦涅槃像の籠細工『籠細工絵本　仮寝姿』
文政二 (1819) 年（国立劇場演芸資料館蔵）

図 5　伊藤若沖作「野菜涅槃図」安永八 (1779) 年頃（京都国立博物館蔵）

れ、この仏教的なアトラクションは浄瑠璃の絵本番付を「見立て」たパンフレットまで摺られていたようである。当時の他の籠細工見世物について『籠細工絵本　仮寝姿』（国立劇場演芸資料館蔵）［図 4］と題する珍しい絵本番付が残っている。これは同じ文政二年初に大坂の四天王寺で展示された籠細工の釈迦涅槃像を宣伝したものである[6]。その籠細工の涅槃像は長さ 24 メートルの巨大なもので、周りには羅漢、菩薩、五十二種の鳥、獣、虫などが造られていたようである[7]。

また、涅槃図のパロディとしては伊藤若沖作の「野菜涅槃図」（別称「果蔬（かそ）涅槃図」安永八 (1779) 年頃、京都国立博物館蔵）［図 5］という有名な例を挙げることができる。涅槃図はお寺でお釈迦様の命日（二月十五日）に展示される絵だが、若沖の絵では涅槃の釈迦が二股大根になり、寂滅を悲しむ羅漢や動物はそれぞれ茄子、カボチャなど野菜や果物になっている。佐藤康宏氏はこの作品の解説の中で「見立て」、「パロディ」という用語を使用しているが、制作の動機については若沖の母の死を記念することや、青物問屋の繁栄を願う意味もあると説明している[8]。また、一説によると、この絵は単なる戯画ではなく、禅宗の「大根は仏をイメージするものである」という教えを示すものであるとも言われている[9]。つまり

図6　若沖作「野菜涅槃図」の復元、『海をわたった華花展』国立歴史民族博物館、2004年

図7　アルチンボルド作「ウェルトゥムヌスに扮したルドルフ二世」1590年（スクークロスター城蔵）

パロディを越えた譬喩的な意味も含まれる可能性があるとも言えよう[10]。国立歴史民族博物館主催「海をわたった華花　ヒョウタンからアサガオまで」展（2004年）でこの「野菜涅槃図」が立体で復元された［図6］。そこに描かれた当時の野菜は六十種類以上もあり、そのほとんどが海をわたってきたものだとされている。これに似たような発想は西洋では十六世紀後半のイタリア画家アルチンボルドに認められ、動植物や果物などを組み合わせて表現されたロドルフ2世の肖像画［図7］や「庭師像」がよく知られているが、そこには宗教的な意味合いはない。

これまでの例では仏像・仏画を普段とは違う材料で造ったり、描いたりするものではあったが、完全なパロディとはいいきれない。そこでさらに一歩すすんで、本物の開帳そのものを模倣するかたちで、食材などで仏像などを見立てる「とんだ霊宝」に戻ろう。

「とんだ霊宝」の特徴はまず本物の開帳が開催されている時期に、その近くで行われたことである。興行小屋の入り口は寺の門前を模せられ、なかは宝物の陳列場のように設われている。観覧者は八文の札銭を払い会場に入る[11]。つまり、形としては明らかに開帳の「うつし」である。観覧者の多くは本物の開帳も見ていたはずである。具体的にその様子を紹介してみよう。安永六(1777)年三月に両国で行われた「とんだ霊宝」の視覚的資料としては、曲亭馬琴の随筆『燕石雑志』（巻三、文化八年、1811）[12]に、この見世物の宣伝をしている引札の図版が掲載されている［図8］。戯作者の大田南畝もその内容を雑記帖『古今街談録』に記録した[13]。また同じ引札の実物は現在、川添裕氏の所蔵となっている[14]。もともと見世物場で配布されていたプログラムのようなものである。この興行の内容を窺える貴重な資料である。右上の提灯に「開帳仏細工物」、その下の幟に「とんだれいほう」と書いてあり、本物の開帳を細工で再現していることが一目でわかる。その下に次の宣伝文が載っている。「此度めづらしからぬ儀を細工に仕り御覧に入れ奉り候処　御町中様方御評判成下され有難

図 8 「とんだ靈宝」の引札、曲亭馬琴『燕石雑志』文化八 (1811) 年

き仕合せに存じ奉り候　右目録の外追て細工出来次第御覧に入れ候　仰合され御来のほど希い奉り候以上」。またこの引札に、造り物は鯰橋源三郎[15]と古澤甚平が考案したものであることが明記されている。この二人は名古屋の細工人であったが、この見世物を造るためにわざわざ江戸に赴いた。また、「細工物宝物目録」の中ですべての展示物が詳しく記されている。つまり三尊仏、不動明王、出山の釈伽如来、宝物鎧かぶと、役行者、後鬼、前鬼、目連の絵像、とまり木に鷹、龍虎古木梅の十種の造り物が同じ会場で展示されていたことが分かる。主に仏像の開帳と有名な画題のパロディである。この引札に細工物の図が載っているのは残念ながら三尊仏のみである。他の造り物については使用された材料のみが詳しく説明されている。たとえば、不動明王は、頭はさざい、顔は鮭の頭、手足と体は鮭の塩引、衣は干蛸、袈裟は昆布、手に持っている釼は刺身の包丁、縛の縄は吊し縄、火焔は鎌倉海老、岩座はサザエとアワビで出来ている。

とんだ霊宝には仏像や仏教関連の伝説的な人物（役行者など）の他に、古典的な世俗の画題もあった。たとえば「龍虎古木梅（りゅうこ こぼくばい）」や「とまり木に鷹」である。「龍虎古木梅」の材料については、龍頭と髭は干蛸、眼はサザエの蓋、頭より瀬通り尾まではサザエ、腹は鎌倉海老、鱗は芝海老、手足は車海老、角は干アユ、雲はアラメ、舌は海老の尾、歯はごまめである。虎頭は、毛並みは椎茸、腹は氷コンニャク、目は玉子、歯は勝ち栗、手足の爪はニンニク、舌は唐辛子、尾は干し大根、古木は辛鮭、梅の花は唐辛子などが使われた。この「龍虎

図9 「目犍連」『仏像図彙』元禄三(1690)年

古木梅」は狩野派の典型的な画題であり、たとえば狩野山楽の有名な「龍虎図屏風」(重文・妙心寺、京都国立博物館蔵)を想起させる。老梅の樹と龍の関係性は老梅が龍に変化するという故事に倣ったものであろう。つまり、江戸時代に特に好まれた画題を立体的に、干物の魚介や野菜を中心に奇妙な材料で再現することが一種のパロディだとみなすことができる。

また釈迦の十大弟子である「目連の絵像」についても残念ながら図は残っていないので、元禄時代の絵入り仏像辞典『仏像図彙』の目犍連の画像を参照までに掲載した[図9]。引札によると目連尊者の頭は玉子、衣はアラメ、鎌は干鰻、火焔はアラメ・唐辛子、鬼は鎌倉海老、腰巻きは椎茸、餓鬼はしぎの焼き鳥、三尊の来迎いずれもごまめ、衣はスルメ、蓮華も皆ごまめ、雲はクラゲ・干瓢・ひだこ、表具は浅草海苔であった。この「目連の絵像」はおそらく餓鬼道におちた目連の母が救われる話を描いたもので、かなり凝った趣向の造り物になっていたと想像できる。この引札に材料が詳しく示されていることこそ、パロディの効果が引き立てられていた証拠である。

この「とんだ霊宝」は平賀源内[16]など当時の証言者によるとかなり評判になったようで、草双紙にも取り上げられたほどである。たとえば米山鼎峨(よねやまていが)作、鳥居清経(とりいきよつね)画『新板観音開帳三宝利生初竹(みつたからりしょうのわかたけ)』(安永六年、1777、東京都立中央図書館加賀文庫蔵)では、「とんだ霊宝」の展示の目玉であった三尊仏と不動明王が隣り合って描かれている[図10]。造り物の不動明王は絵題箋の図柄にも使われている[図11]。挿絵には男女と子供の観客五人の前で絵解きをしている羽織袴姿の口上が立っており、棒で指し示しながら不動明王と三尊仏の説明をしている。本文には、「これにわたらせ給ふは不どうめうわう御形よりかふはからざけけさはばかのめざしくわえんはかまくらえびだいざはさざいあはびでござります又三ぞんぶつはそんたいはとびうを天衣はするめふなごこうはひだらにとこふじでござりまするだいざはすいものわんでござりますちかふよつてごえんのむすばれませう」(「これに渡らせ給ふは不動明王、御形より顔は干鮭、袈裟は馬鹿の目ざし、火炎は鎌倉海老、台座は栄螺鉢でござります、又三尊仏は、尊体は飛魚天衣は鯣鮒、後光は干鱈に常節でござりまする、台座は吸物椀

図 10 「とんだ霊宝」の三尊仏と不動明王、『新板観音開帳　三宝利生初竹』安永六 (1777) 年（東京都立中央図書館加賀文庫蔵）

図 11 「とんだ霊宝」の不動明王、『新板観音開帳　三宝利生初竹』絵題箋、安永六 (1777) 年（東京都立中央図書館加賀文庫蔵）

でござります、近う寄って御縁の結ばれましやう」）と書かれている。観客は「なるほどよいさいくじや」「ひやうばんほどあつてよし」と感嘆の声をあげている。つまり、「」上はただ材料のことを説明しているだけではあるが、この説明がなければ、パロディの面白さが薄くなってしまう。また、「御縁の結ばれましやう」という言葉があるように、この細工物はおめでたい造り物と見なされていたようだ。

近年、渋谷区のたばこと塩の博物館で企画された展覧会「大見世物――江戸・明治の庶民娯楽――」[17] でこのような視覚資料をもとに「干物の三尊仏」が同じ材料の食品見本で見事に再現され話題を呼んだようである［図 12］。

また、馬琴の『燕石雑志』にもとんだ霊宝について記述があるので紹介しよう。「安永七年の夏の頃信濃なる善光寺の阿弥陀如来これも回向院にておがまれ給ひけり近在近郷いへばさらなり彼此なるわかきものども老たるものどもあさまだきよりくるるまでみな大念仏して参ることいと〳〵夥しなんどいふべうもあらず両国橋のあなたこなたに見せ物多く出けりとんだ霊宝と名づけて乾魚乾物何くれとなくとりあつめて仏をつくり或は鳥獣の形を作りならべてみす亦鬼娘と書たりける幟を建ていとおどろ〳〵しきかたはものをみす」[18] と記されている。とんだ霊宝は多くの人が集まる実際の出開帳と同時期に行われており、他の見世物も同じく両国に開催されていたことがこの馬琴の随筆によって明らかにされている。この事実は斎藤月岑編『武江年表』（嘉永三年、1850）[19] にも報告されている。つまり安永七年六月

図 12 「とんだ霊宝」の三尊仏の復元、「大見世物――江戸・明治の庶民娯楽――」たばこと塩の博物館、2003 年

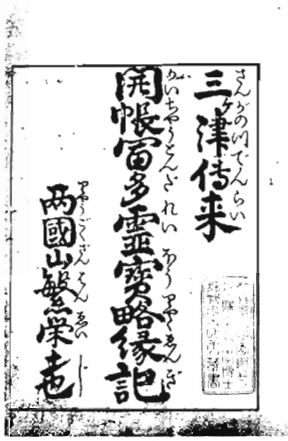

図 13 「とんだ霊宝」の各見世物を紹介する『三ヶ津伝来　開帳冨多霊宝略縁記』安永六(1777)年（東北大学狩野文庫蔵）

朔日より閏七月十七日までに、回向院において信州善光寺の弥陀如来の開帳が行われ、「此時、開帳繁昌して、諸人群をなす。暁七時頃より榑の先に提灯多くともしつれて、高声に念仏を唱へて参詣する者多し。平賀鳩渓、烏亭焉馬が求によりて工夫をなし、小き黒牛の背に六字の名号をはらはし、見せものに出して利を得たりといふ。又鯰江源三郎・古沢甚平といふもの、細工にて飛ンだ霊宝と号し、あらぬ物を見立て、仏并などの形に作りたる見せもの、鬼娘といへる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ」ということである。この記述では仏像を「あらぬ物を見立て」という表現が使われたことが興味深い。また、このとんだ霊宝の目玉になった三尊仏の造り物が同時期に公開された著名な善光寺の秘仏本尊・弥陀如来三尊のパロディであった可能性も考えられる。ちなみに、この善光寺の出開帳は江戸で最も評判が高く元禄五(1692)年を初めとして江戸時代を通して五回も行われた[20]。多くの文献では、安永七年に善光寺の出開帳と、とんだ霊宝が同時に行われたと記してある[21]。

また、戯作者の烏亭焉馬が『三ヶ津伝来　開帳冨多霊宝略縁記　両国山繁栄地』（安永六年三月、東北大学狩野文庫蔵）［図 13］という七丁の小冊を作り、両国の見世物の会場で売りさばいていたようである[22]。このパンフレットには挿絵はないが、それぞれの代表的な造り物の紹介と仏教の文句をもじった文章が興味深い。その見世物の名を挙げてみると「乾物役行者　後鬼　前鬼」「塩引不動尊」「胎内十月子安観音」「意馬心猿像」「八重歯之太刀」「小女茶屋小屋」「鵜飼躰像」「浄瑠璃世界の曼荼羅」「犬神の霊」「九本蓮台」「実盛水　牛　鎧兜」「吾妻形御陰門」「茶輪塔」「船板名号」「真似蔵笊」の十五種類である。先のとんだ霊宝の引札と共通の造り物は「乾物役行者」と「塩引不動尊」の二点のみであり、他の物については想像するしかない。

このように「とんだ霊宝」は安永六年の春から一年以上もの間、好評が続き細工人は莫大な利潤を得て名古屋に帰った。また、「とんだ霊宝」を摸倣して両国で三カ所、上野山下で

図 14 「瀬戸大将」鳥山石燕『百器徒然袋』天明四 (1784) 年

図 15 台所道具（杓子、籠、簾、まな板、飯櫃、わさび卸し、茶碗など）で造られた「戎」、『造物趣向種』天明七 (1787) 年

二カ所において同じような見世物が造られたが、それに及ぶことなく間もなく閉場した[23]。

パロディは多種多様な現象で、文学による言葉のパロディのみならず、視覚的なパロディ、造形的なパロディも存在し、江戸時代の庶民文化の中で重要な部分を担っていたことが改めて確認できた。十八世紀中頃から細工見世物、あるいは細工造り物と呼ばれる庶民的な娯楽が現れた。もともとは、開帳の際の飾り付けとして作られたもので、神仏に奉納するものだったようだが[24]、それが徐々に純粋な娯楽として発展していった。

平賀源内の研究や『風流志道軒伝』の翻訳の一環として見世物を調べたフランス人のユーベル・マエス氏はこの細工物を “montage figuratif”（象形的な組み立て）と呼び、その発想に鳥山石燕『百器徒然袋』（天明四年、1784）などの見立て絵との関連を指摘した[25]。たしかにこの絵本に出ている「瀬戸大将」［図 14］のような陶磁器を寄せ集めて出来た妖怪は見世物の造り物と着想が近いと言える。また、造り物が流行となるにつれ、「見立て造り物の絵本」[26]とでも言うべき出版物を介して、さまざまな造り物が紹介され人々に享受された。たとえば「とんだ霊宝」が行われた十年後に『造物趣向種』（天明七年、1787）［図 15］という絵本が狂歌師の栗柯亭木端の門弟たちと絵師・山村越影斎によって大坂で出版された[27]。明治まで再板され広く流布したこのような種本を参考にして、都市祭礼などの場で実際の造り物が拵えられた可能性があると考えられる[28]。

それらの造り物は基本的に「とんだ霊宝」と発想が同じである。つまり実際の動物、鳥、楽器、歴史人物や七福神などを特定の材料（文銭、瀬戸物、貝、竹籠など）で立体的に再現し、素材の意外性、作り方の巧みさと本物らしさを愉しむことである。現在でも各地方の祭礼で、野菜や日用品などを使用した造り物の伝統が引き継がれ人気を博しているようである[29]。しかし、普通の細工造り物と「とんだ霊宝」との違いは、後者がまるで寺社の宝物

の開帳そのもののパロディだという点である。

「とんだ霊宝」と趣向の同じものとしては、「勝手道具や小間物を尊い宝物に見たててこっけいなことばで説明したり、おもしろい法談をしたりする興行」[30]である寺社開帳もどきの「おどけ開帳」が挙げられる。崔京国氏の研究によれば、両国の「とんだ霊宝」のおよそ十年後の天明五(1785)年に大坂で始まったとされている[31]。この最初の「おどけ開帳」が神社の遷宮という宗教的行事の節に行われたことは特筆に値する。また、「おどけ開帳」の会場で絵入りパンフレットが売られており、出版物という媒体でもこのような宗教的なパロディを愉しむことができた[32]。そして「とんだ霊宝」と上方で行われた「おどけ開帳」のもう一つの共通点は、ただ造り物を展示しただけではなく、人々の前で口頭で滑稽な解説を加えたことである。その解説は縁起や絵解きのパロディだったようである。西沢一鳳『皇都午睡』(嘉永三年、1850、写本、上之巻、早稲田大学図書館蔵)によると文化年間に大坂の一心寺において嵯峨清涼寺の出開帳が行われた際に呑龍という僧の絵解きぶりが評判になり、それ以降本人が「おどけ開帳と号てわけもなき細工物にて仏像の作り物して防[阿]坊陀羅経とてなが〳〵と自作経文を唱」えたという。つまり、従来の仏教的造り物に、さらにお経のパロディを加えている。ここで今回は詳しく紹介しないが、この呑龍が経文を擬した放蕩一代記の阿坊陀羅経が朝倉著『見世物の研究』に記録されているのでご参照頂きたい[33]。このような阿弥陀経をもじった経文・阿坊陀羅経(あるいは阿呆陀羅経)を後に幕末まで願人坊主が盛り場などで巷談や時事風刺に乗せて木魚を叩きながら唱えて金銭を乞ったようである[34]。

ここでまとめとして「とんだ霊宝」とパロディの問題についていくつか指摘できる。まずはじめに、造形的なパロディは公共の場で行われ、文学のパロディとは違い個別ではなく、他者と共感しあって体験するものである。また、高等な知識は必要ではなく、庶民レベルでの分かりやすいパロディである。

そして、パロディのプロセスについては、実際に存在する「物」がパロディの対象になっている。この対象を思いがけない材料で見立てて、それによって見る物を驚かせたり、笑わせたりするのである。また「とんだ霊宝」では信仰の対象である仏像・仏画という神聖なものが公共の場で、しかも本当の開帳と同じ場所、同じ時期に公然とパロディ化されている。このようなパロディに対する抵抗感、あるいは社会的なタブーがなく、それどころか見る者にとって愉快な一種の娯楽だったように思われる。川添氏の言葉を借りれば「信心と遊楽一体のもう一つの表現」として解釈すべきである[35]。しかし、同時代の西洋の場合であるならば、このような宗教的なパロディは同じ状況ではあまり考えられない。たとえばフランス革命後、宗教の行事などをパロディにしたり、風刺したりする版画などが多く現れたとしても、それはあくまでも反聖職者主義者による行為であり、一般の人たちが公然と楽しむことができたものではない。また現在でもキリスト教圏では宗教的な画像のパロディや風刺がおこなわれる際に、しばしば社会問題になるのである。ところが、江戸時代では宗教行事の祭

図 16　桔多淇作「民衆を導く自由の女神」をパロディ化した“Liberty Leading Vegetables”「蔬菜博物館」シリーズ、2008 年

り化と宗教に対する自由な態度が推し量れる。「とんだ霊宝」にみるようなパロディは娯楽とみなされ、批判的な風刺とは区別するべきであろう。

最後に、コンテンポラリーアートにおける造り物と芸術のパロディの精神がどのように受け継がれているかを考えさせられる興味深い例を紹介しておく。2008 年、北京の写真画廊・巴黎北京攝影空間で桔多淇という若い女性写真家が「蔬菜博物館」(The Vegetable Museum) と題する一連の写真を展示した[36]。イタリアルネサンス期の名画をはじめとして、十九世紀フランス歴史絵画、クリムト、ゴッホ、シャガール、ピカソ、アンディ・ウォーホルなどの世界名画十九点をすべて市場で買った野菜を使って見事に見立てて撮影するという面白い試みである。図録にはもとの名作の写真と作品に使われた素材（野菜）を明記し、作品名もパロディ化されている。たとえばドラクロワの「民衆を導く自由の女神」は“Liberty Leading Vegetables”［図 16］になったり、豆腐などで作られたモナリザは“Mona Tofu”になったりする。メディアは違うものの発想は江戸時代の伊藤若沖の「野菜涅槃図」と共通している。普段なら気づかないことだが、ジャガイモは絵画で人物の顔に使われるとすべて「表情」が違うことがわかると、桔多淇は図録の序文の中で指摘している。これは半分冗談めいたことを書いたのかもしれないが、見立て・パロディというプロセスを考える上で重要な鍵なのかもしれない。つまり、造り物を制作することによって野菜に命と役目を与える。また、名画をパロディ化することによって本物の作品を新鮮な眼で見せたり、その意味を改めて考え直すきっかけになるという不思議で愉快な経験をする。江戸時代に花開いた見立て、遊びの精神はこのようにコンテンポラリーアートのなかにも生き続いているのである。

註

1) 「とんだ霊宝」についての先行研究としては朝倉無声『見世物研究』1928 年初版、ちくま学芸文庫、2002 年、424–427 頁、比留間尚『江戸の開帳』吉川弘文館、1980 年、86–91 頁、川添裕『江戸の見世物』岩波新書、2000 年、80–84 頁などがある。

2) 前掲、比留間尚『江戸の開帳』40 頁、『ひとは都市になにを見たか——博覧都市　江戸東京——

開帳、盛り場、そして物産会から博覧会へ』展覧会図録、江戸東京博物館、1993年、17–18頁。

3) 市古夏生、鈴木健一校訂『新訂　江戸名所図会』巻六、ちくま学芸文庫、1997年、68–69頁。

4) 『泉涌寺霊宝拝見図・嵯峨霊仏開帳志』名古屋市博物館資料叢書3、猿猴庵の本、名古屋市博物館、2006年。

5) 『新卑姑射文庫初編』名古屋市博物館資料叢書3、猿猴庵の本、名古屋市博物館、2002年。2007年に名古屋市博物館の展覧会では、猿猴庵の絵をもとに籠細工が再現された。

6) 川添裕「籠細工の流行空間　社会現象としての見世物」『太陽別冊』「見世物はおもしろい」123号、2003年6月。前掲『江戸の見世物』69–72頁。

7) 前掲、『新卑姑射文庫初編』の序文（58頁）に猿猴庵は四天王寺の涅槃像の籠細工について触れている。

8) 佐藤康宏『若沖・蕭白』新編名宝日本の美術、第27巻、小学館、1991年、58頁。

9) 2008年1月2日～2月3日「若沖を愉しむ」特別展示、京都国立博物館ホームページ「果蔬涅槃図」解説。http://www.kyohaku.go.jp/jp/tenji/heijou/kaiga/kinsei/jya.html

10) この「野菜涅槃図」を美術史的な視点ではなく、歴史や文化的な観点から検証し、江戸の野菜文化がこの画にどう反映しているかという論考が食文化研究者の伊藤信博氏によって行われた（「〈野菜涅槃図〉と描かれた野菜・果物について」『言語文化論集』第30巻第1号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2008年、3–24頁）。伊藤氏の調査によるとこの作品には八十八種類の果蔬が確認できる。

11) 前掲、朝倉無声『見世物研究』426–427頁。

12) 『日本随筆大成』第二期第十巻、日本随筆大成刊行会、1929年、332–333頁。

13) 大田南畝『半日閑話』巻十三（『日本随筆大成』第一期第四巻、日本随筆大成刊行会、1927年、509頁）の安永六年四月に「先月頃より両国橋広小路にてとんだ霊宝のみせ物大に流行す」と記され、引札の目録が詳細に記録されている。

14) 前掲、川添裕『江戸の見世物』80頁に掲載。

15) この細工人の名前は「鯰橋源蔵」という表記で享和二年（1802年）六月の猿猴庵の日記にも出ている。同年、名古屋の広小路の開帳で竜宮海人の玉取水からくりを造ったと記されている。（『金明録――猿猴庵日記』名古屋叢書三編第14巻、名古屋市教育委員会発行、昭和61年刊）。文化元(1804)年に、名古屋の大須観音で寄物細工、とんだ霊宝を製作したことも知られている（前掲、『新卑姑射文庫初編』年表70頁）。

16) 平賀源内は『風来六部集上　放屁論後編』（安永六年）に「当時諸方にて評判の品々は。飛んだ霊宝珍しき物。十月の胎内千里の車。鹿に両頭あれば猿に曲馬あり」と記している。

17) 『大見世物――江戸・明治の庶民娯楽――開館二十五周年記念特別展』たばこと塩の博物館、2003年、45頁。

18) 『日本随筆大成』第二期第十巻、日本随筆大成刊行会、1929年、330頁。

19) 今井金吾校訂『定本　武江年表』中巻、ちくま学芸文庫、2003年、69頁。

20) 前掲『ひとは都市になにを見たか――博覧都市江戸東京――開帳、盛り場、そして物産会から博覧会へ』20–25頁参照。

21) たとえば鈴木白藤(1769–1812)『鳩渓遺事』（水谷不倒『平賀源内』裳華書房、明治29年、『水谷不倒著作集』巻三、中央公論社、1974年、47頁）には次のように記されている。「又、安永七年、両国回向院に於て、信州善光寺如来の出開帳ありし時、鯰江源三郎・古沢甚平などいへるものの工夫にて、飛んだ霊宝と称し、仏菩薩の形に作り、又は鬼娘など観せ物いづれも見物群集し

けるを、烏亭焉馬とて後には戯作者となりし男、其の頃は大工なりしが、大に羨み、一日源内を訪づれて、此度の開帳に何ぞ面白き工夫はなきかと、これも亦源内の智恵を借りに来りしに、そはいと易きことたりとて、小き黒牛を一匹買ひ来れと命じければ、焉馬詞の如くせしに、源内は一二夜過ぎて之を焉馬に与ふるに、いかなる術や施しけん、牛の背には南無阿弥陀仏と六字の名号ありありと出現しぬ。焉馬大いに驚き且悦び、固より才ある男なれば、道理らしく縁起を拵らへ、両国の観せ物場へ出せしに、観者堵の如く、焉馬また意外の利を得たりければ、源内に厚く礼を述べ、其の方法を尋ねけれども、源内笑ひて答へざりき。」

22) 前掲、大田南畝『半日閑話』509頁には「目録　観世物場にて是を売る　開帳とんだ霊宝略縁記なり」とある。

23) 前掲、大田南畝『半日閑話』509頁。前掲、朝倉無声『見世物研究』427頁。

24) 前掲、朝倉無声『見世物研究』432頁によると、記録では開帳に細工が奉納された最古の例は寛延二年（1749年）の不忍池弁財天開帳の際に文銭で作られた蛇が納められたことである。

25) Hubert Maës, "Attractions foraines au Japon sous les Tokugawa," *France-Asie*, n° 184, hiver 1965-1966, 173-202.

26) 崔京国解説『造物趣向種三種』太平文庫、1996年、178頁。

27) その続編として『四季　造物趣向種』が天保八(1837)年、『造物趣向種　二編』が安政七(1860)年に出版された。前掲『造物趣向種三種』所収。

28) 西岡陽子「都市祭礼における風流に一側面――“つくりもの”の場合――」大阪芸術大学紀要『藝術』24号、2001年、70-77頁。また、『大見世物展』に『造物趣向種』から三点の造り物が復元された。前掲『大見世物――江戸・明治の庶民娯楽――』43頁。

29) 有名なものとしては例えば富山県福岡町で地蔵祭りにさかのぼる「つくりもんまつり」が挙げられる（鵜飼正樹「つくりもんまつり　作る人・見る人」『太陽別冊』「見世物はおもしろい」123号、2003年6月、100-105頁、川添裕『見世物探検が行く』晶文社、2003年）。また、最近『KAZARI　日本美の情熱展』サントリー美術館、2008年において出雲で寛政五年（1793年）から毎年、平田天満宮祭の際に行われる「平田一式飾り」という造り物が紹介された。2008年から国立民族博物館において「民俗行事における造り物の多様性」という共同研究（福原敏男代表）が行われている。

30) 『日本国語大辞典』巻三、小学館、1973年、656頁。

31) 前掲、崔京国解説『造物趣向種三種』175-176頁。崔氏はおどけ開帳の由来について、江戸時代の大坂における市井の出来事を記した浜松歌国編『摂陽奇観』（天保四年、1833）三十九巻という資料に基づいている。朝倉無声（前掲『見世物研究』264頁）はおどけ開帳の発祥を寛政三(1791)年四月にしている。

32) この類の絵入りパンフレットとして崔京国氏は天明七(1787)年刊『造物噺の種（つくりもののはなしのたね）』を紹介している。崔京国は東京大学大学院博士論文『江戸時代における「見立て」文化の総合的研究』1994年、のなかで「見立て絵本」の問題を調べた。

33) 前掲、朝倉無声『見世物研究』265-266頁。

34) 「阿呆陀羅経」『大道芸通信』144号、2006年、5月。

35) 前掲、川添裕『江戸の見世物』87頁。

36) 桔多淇「蔬菜博物館」巴黎・北京攝影空間、2008年